

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

日本語の文体・レトリック辞典

中村 明著 長年、日本語の文体論・表現論を研究してきた著者による本格的な日本語のレトリック・文体論辞典。約一〇五〇項目を収録し解説定価三三六〇円

(価格は税込)

万葉集を知る事典

桜井・尾崎他編 万葉の時代、風土、生活と文化、歌びとと名歌など、歴史や社会・文化をふまえながら、万葉を読むための基礎知識を解説した定価二七三〇円

吾妻鏡事典

佐藤和彦・谷口 榮編 本書は、政治と合戦、登場人物、吾妻鏡の社会史・書誌研究から構成し、吾妻鏡を多角的に考察し、「吾妻鏡」の魅力に迫る。定価五二五〇円

地方別方言語源辞典

真田信治・友定賢治編 うっちゃる・まつたり・はぶてるなど全国各地の代表的な方言を十七の地域に分けて約五七〇語の語源を詳細に解説した定価二五二〇円

CD・ROM版 くずし字解読用例辞典

山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆定価二九四〇〇円

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
<http://www.tokyodoshuppan.com>

半世紀にわたる「与謝野研究」の集大成！

新版 評伝 与謝野寛 晶子 明治篇

逸見久美著 A5判上製・768頁 定価二二、六〇〇円

発売中 好評を博した旧版「評伝 与謝野鉄幹 晶子」から32年、「与謝野寛 晶子 書簡集成」や「鉄幹 晶子全集」の編集をつとめた著者がその成果をもちこんだ「与謝野研究」の決定版。具体的な作品や書簡資料の最新研究成果をふまえて、寛・晶子の生涯を描く。本書は寛と晶子の生い立ち・出会いから、「明星」の創刊から廃刊まで、新詩社の動向、「みだれ髪」の刊行や寛の渡欧までの激動の明治期を収録。

日記の存在しない「与謝野夫妻の日常をつぶさに語る明治25年河野鉄南宛書簡から晶子没年までの未公開書簡千三百通を含む二千百余通を収録

与謝野寛 晶子 書簡集成

逸見久美編 全四冊完結 A5判・定価四三、四七〇円

第1巻 明治25年〜大正6年 書簡416通収録・308頁

第2巻 大正7年〜昭和5年 書簡557通収録・368頁

第3巻 昭和6年〜10年 書簡534通収録・312頁

第4巻 昭和11年〜17年・索引他 書簡601通・392頁

①〜③ 定価各二〇、二九〇円・④のみ定価二二、六〇〇円

結婚後の心情を赤裸々奔放に詠んだ歌集を丹念に評釈
夢之華全集〔晶子第六歌集〕 発売中
逸見久美著 A5判上製・312頁・定価五、九一三円

八木書店 出版部

【呈詳細内容見本】 *定価は本体+税5%の総額表示です。
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 S保迄
03-3291-2961 (FAX-6300) <http://www.books-yagi.co.jp>

4910037871176
01524



ISSN 0452-3016
雑誌 03787-11

国文学 11

国文学 解釈と教材の研究

平成十九年十一月十日発行(毎月一回十日発行)第五十一巻第十四号十一月号
昭和三十一年九月十五日 第三種郵便物認可 (通巻七五八号)

定価一六〇〇円 本体一五二四円

特集 万葉の恋歌

ケータイ短歌の時代に

第五二巻第十四号 二〇〇七年十一月号

特集 万葉の恋歌

ケータイ短歌の時代に

- ◆ 等身大の恋歌・口訳 上野誠
- ◆ 現代短歌と万葉の恋 小島ゆかり／永田紅
- ◆ ケータイで詠む月と恋
- ◆ 恋歌の小道具・アイテム10
- ◆ 恋の占い——おみくじ文化
- ◆ 身崎壽／品田悦一／仁平道明
- ◆ 工藤隆／山名美和子

国文学

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇七年 第五二巻第十四号

解釈と教材の研究

学燈社

心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず
本荘雅一

第二回 心意伝承とは何か②

兆・応・禁・呪の心意現象—柳田国男の志—

無意識の継承

心意伝承を追究する。これは言い換えれば、人間の生命活動の実相を見極めようとする問題提起である。

発起人は、柳田国男ということになっている。ただ少しややこしいのは、柳田国男自身の著作の中には、「心意伝承」の文字は現れないのである。柳田は「心意現象」という言葉を使い、「心意伝承」はむしろ、折口信夫の著作や、講義録でくり返し現れる。しかし折口自身は、「柳田先生が先鞭を付けた」と述べているのである（『折口信夫全集ノート編』第七巻）。この辺りのいきさつは、上原輝男が『心意伝承の研究 芸能編』（桜楓社一九八七年）を著し、「序章 実感実証の学として（柳田国男の場合）（折口信夫の場合）」で四十数頁にわたって、詳細に論じているのを参照されたい。

この場では、上原の論との重複を避けるが、おそらく柳田、折口兩人の間では、「心意現象」とも「心意伝承」とも言い交わされており、ただ著作という公の場では、柳田は故意に「心意伝承」の使用を避けていたのである。その意図に関する私なりの見解は次回に述べるとして、まずは柳田が何を目的として、心意に関する問題提起をしていたかを明らかにする。

我々が無意識のうちに、過去の生活を継承していることは実に多い。それが時あって顕れるのは、過去の生活そのものがまだ我々の心に伝わっているからである。いかに態様は変化しても、以前の生活の影のごときものが無意識の中に身にくっついているのである。我々は我々の過去の一部分がここからで、もうかがわれるという予想を持ち得るとともに、か

く新しくなった時代にまで、なお旧風の残存することを人生の不思議とせずにはいられないのである。

〔民間伝承論〕一九三四年『柳田国男全集28』

ちくま文庫 三二七頁

とかく西洋のフォークロアが、まるで植物採集でもするかのように、近代人による前近代の生活風俗の採集管理に偏っていたのに対して、柳田は、自分達自身の問題を考える学問として、構成し直そうとしていた。「民間において、すなわち有識階級の外もしくは彼等の有識ぶらざる境涯において、文字以外の力によって保留せられている従来の活き方、または働き方、考え方を、弘く人生を学び知る手段として観察」（『民間伝承論』二六一頁）するのを眼目とした点にも、それは現れている。そもそも柳田の学問は、「何ゆえ農民は貧なりや」（次掲「郷土生活の研究法」九四頁）という痛切な問いに始まっているのであった。

我々の学問は結局世のため人のためでなくてはならない。即ち人間生活の未来を幸福に導くための現在の知識であり、現代の不思議を疑ってみて、それを解決させるために過去の知識を必要とするのである。（中略）郷土人の心の奥の機微は、外から見た

り聞いたりしたのではとうてい分りようもなく、結局彼等自身の自意識にまつより他に仕方はないのである。つまり我々の採集は兼ねてまた、郷土人自身の自己内部の省察でもあったのである。

〔郷土生活の研究法〕一九三五年『柳田国男全集28』

ちくま文庫 三二一頁

こんにちの感覚では、これほど陳腐なスローガンの羅列も珍しい。いや恐らく、当時においても読み手が気恥ずかしくなるようなものではなかったろうか。しかしこの様に宣言する柳田自身の、あの膨大な著作の海のどこにも、「人生こうすれば勝てる」式の軽薄なアフォリズムは出てこない。「どうすれば良いか」といった、功利性を期した問いさえ、ない。ひたすら民衆生活の生感・実態を追究しつづけてきた。だからこそ、この宣言にも清々しい重みがある。

三部分類

手段としては、フォークロアの方法を援用する。しかしひたすら好事家のコレクションのような気まぐれな採集に終始していたのでは、未来に生かし、貢献する学問

とはなり得ない。何を知るため、どんな目的に到達するために、民間伝承を採集し観察するのか、明確にしなければならぬ。柳田の提唱する、採集資料の三分分類はそのためのものであった。現在目の当りにする素材な出来事についても、常に「なぜ」という疑問をもつて、対峙する。「疑問の成長を目標にし、適切な疑問を成長させるため」(同三七〇頁)、そして「今後目的を持って採集する人たちを適宜に働かせるため」(同三七二頁)に、次のような分類案を出した(図参照)。以下、概ね『民間伝承論』(一九三四年)と『郷土生活の研究法』(一九三五年)の内容に即してまとめてみる。

第一部 生活諸相(目に訴える有形の文化)

第二部 言語芸術(耳を通して得られる言葉の文化)

第三部 心意現象(感覚に訴える、同郷人でなければ気付かぬ文化)

第一部の生活諸相とは、農林水産狩猟採集などの具体的な生活風俗や、その素材といった、形式や形のあるもの。旅行者にとって、訪問先でまずは気付ける類のものである。

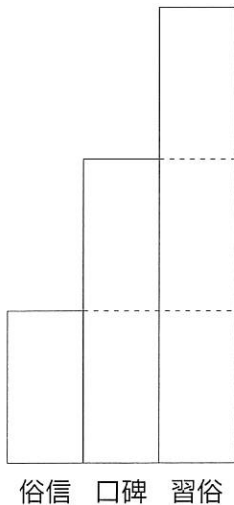
第二部の言語芸術は、例えばことわざ、なぞなぞ、呪

待たねばならない、「同郷人の学」であるとも加える。

かつて私は、「同郷人でなければ」という柳田の方法論に、狭さや限界を感じていた。が、よく考えてみると、これは実は西洋近代科学の方法論との訣別であり、柳田なりの学問研究の深め方掘り方を模索してのことであつたのだ。近代科学は、対象と研究者とをはっきり区別し、あくまでも研究者の理性によって対象を分析し、要素の関係性や機能の法則性を究明しようとする。民俗学と混同されやすい民族学(エスノグラフィ)の場合、対象の未開社会に同化することによって、資料を採集する。この場合、未開社会をあくまでも文明人にとっての他者であると規定していることは見逃せない。文明人である自分をあえて一時的に同調させ、採集業績を上げようとする点で、従来の科学的態度の延長上にあると言える。

それに対して柳田の方法は、ある社会の成員が一つの視点をもって、自分の社会そのものが持っている心性を客観的に捉えるという、自他未分の状態から、自他分離して行く方法を試みようとしていたのである。たとえば禁忌の意識などは、「行動しない」という表し方であるから、よそ者にはどうあがいても、その存在すら把握できないこととなる。「禁忌の意識・信仰」という目あてを持って、同郷人なら採集できる。これによって、今ま

目で見ル 耳でキク 郷人ノ感覚



図「民間伝承」『柳田国男全集28』三七三頁より

文、歌謡など、その共同体との共同生活を通して得られる情報伝達の形式である。寄寓者として、その社会と親しく接することで、得られるもの。

第三部の心意現象は、目で見たり耳で聞いたりしただけでは伺い知ることのできない、感情・感覚・気分を示す。しかも、個人レベルのものではなく、共同体全体としての気分である。「実はこれこそ我々の学問の目的であつて、あとの『一部』と『二部』の二つは、いわばこれに達するための、途中の階段のように考えているのである」(『郷土生活の研究法』二二四頁)と柳田は言う。ことに、これは感覚に訴えるものであるから、異郷の者や外国人による研究ではなく、同郷・同国人による研究を

で意識していなかった生活事象を、民間伝承資料として認識しうる。しかもそれは、自分自身の生活感情に裏打ちされたもの。分析されていない、ナマの資料である。このように、見るものと見られるものとの分離のないところから出発し、しかも専門の研究者でない一般人々による採集・研究という、方法論でもあつたのだ。

柳田はよく、西洋の実証科学の方法を取り入れて、日本民俗学に科学としての地位を確保しようとしたと言われるが、さほど単純に、科学的方法に倣っていたわけでもなかったのだ。むしろ近代科学批判ともいべき、新しい学問の確立を考えていたと言える。では、その同郷人が採集する心意現象の研究は、どのようにして行うべきか。その前提となる考え方について、柳田はこう言う。

「群衆心理学にあつてもややもすると個人の心理の集積したものを、群の心理と見なそうとする傾向がある。要するに現在の心理学の実験をもつてしては、群衆から個人に与える心理影響は分つても、群現象そのものとはうてい知ることにはできないのである。そこで我々は(中略)群の心理を観る方法を樹てたいと思つている」(『郷土生活の研究法』二二五頁)。だからたとえば、フロイトの精神分析と比較しても、かれが個人的な心理のはた

らきに向かうのに対して、柳田の思考はむしろユングのいう、集合的無意識への関心に近づくわけである。国会図書館の目録で見る限り、フロイトの『精神分析入門』の翻訳は、アルス社版一九二七（昭和二）年が最も古いので、柳田も読んでいた可能性はある。管見にしてその学説について触れた記事は知らないが、この当時すでに対抗意識は持っていたであろう。面白いことに、柳田が生まれた一八七五（明治八）年は、C・G・ユング生誕の年でもある。つまり二人は同い年である。先頃他界された河合隼雄によってユングが日本に紹介されたのが、一九六〇年代だから、一九三四年当時、二人はさすがに何の接点もなかったはずである（もしもあるとしたら一九二一年のヨーロッパ旅行の時か。その年はユングの名著 *Psychologische Typen* [邦訳『タイプ論』みすず書房 一九八七年）出版の年でもある）。しかし堀一郎が、柳田の学問を「現存する民間伝承と民間習俗から、日本人の心理の中に一貫して流れつづけた信仰のアーケタイプを求めようとした」（『柳田国男と宗教史学』『國文學』特集「柳田国男と折口信夫」一九七三年一月）と評するよ
うに、ユングとの区別が困難なほど、互いに近い問題意識を持っていたのは確かだ。意識の共時的感染性ともい
うべきものを、感ぜずにはいられない。ついでながら最

近では、『心はどのように遺伝するか』（安藤寿康著 講談社 二〇〇〇年）を解明する行動遺伝学が耳目を集めているが、個人の遺伝情報がいかに知能や意思・行為に影響を及ぼすかといった、個人レベルの作用を問うもので、これも柳田の立場とは異なる。

兆・応・禁・呪

心意は、生きる目的に対応して働くと、柳田は考えた。生きる目的とは、ひとことでは言えは幸福であり、や
や具体化するなら、家内安全、無病息災、子孫繁栄、
等々、といったことになる。生活目的を達成するため
には、この世で生きて行くためのさまざまなことを知ら
なければならず、そしてその知を運用しなければなら
ない。ということから、心意の働きをまずは「知識」と
「生活技術」とに分けた。

「知識」を、出来事の善悪判断をするための〈判断知
（批判知）〉と、出来事の因果を考える〈推理知〉とに分
ける。

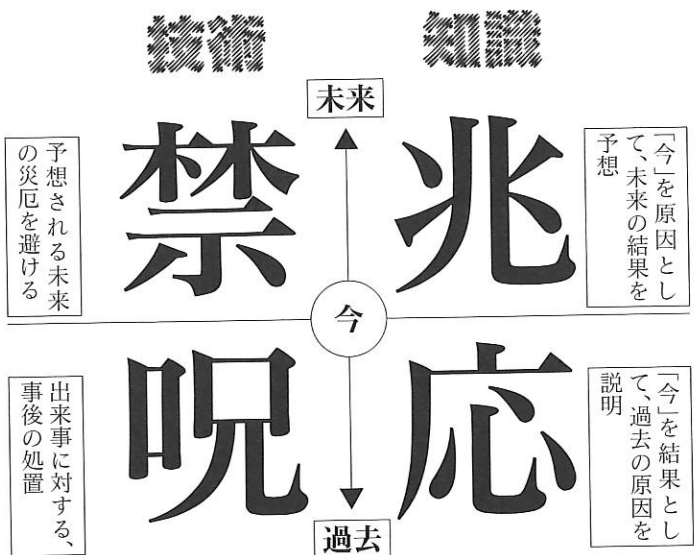
〈判断知〉は、道徳意識の問題である。
〈推理知〉については、さらに時間軸を用いて二つに分
けた。即ち、今の出来事を原因として、未来に起きる

ことを予測する「兆」知。対して、今の出来事を結果として、その原因を過去にもとめる「応」知。「兆」としては、彗星の出現や日食月食は凶兆であるとか、「魘いぢが路を横切ると願い事かなわぬ」などがあげられる。「応」は、現在の科学的知識に通じるもので、未来予測も、「応」の集積として導き出したものに過ぎない。「燕が低く飛べば雨」など。

「生活技術」としては、知に対応して、善悪に関わる〈判断術（批判術）〉と、因果関係を実際にコントロールしようとする〈推理術〉とがある。

〈判断術〉とは、教育である。

〈推理による術〉は、先述と同様、未来と過去との時間軸で分ける。一つは、未来の災害を予測してその原因を防ごうとする「禁」術（タブー）。もう一つは、起きてしまった出来事に対して望ましい方向へ導こうとする「呪」術。「禁」には「敷居を踏んではいけない」「室内で傘をさすな」などがある。「夜爪を切ると親の死に目に会えぬ」のように、禁を犯すとどんな制裁を受けるか示すものもある。「呪」としては、さまざまな医療技術が典型的である。素朴なもので、緊張するとき手のひらに「人」と書いて呑み込む、とか、便意を催したが手を離せないとき他人に用を足してもらおう、といった笑え



るものもある。母に頼まれた妹が、「出ないよー」と泣いていたことがあった。

「道徳」知・「教育」術は、一見理性に基づくものであるが、しかししたとえば、かつて仇討ちが美德とされてきたこと等、考えるべき問題は多い。

「兆」「応」知と「禁」「呪」術は、きわめて感覚的で、抗い難く内からわき起こる心意の働きののである。

こうした目安をもって、民俗資料を採集するわけだが、その際、一部二部とは無関係に、純粹に心意現象の資料だけを採集する、というのではない。柳田自身の、三分類の図に示される如く、第一部の具体的形象にも、それを成り立たせる心がひそみ、第二部の言語情報にも、その背後に倍音のごとき情念が立ちゆらぐ。「一部二部三部と分けたのは便宜上のことであって、底には三部聯繫していることを忘れてはならない」「必要なのは部分部分の記述や分析ではなくて、その後に来るべき総合なのである」「分類が分業を誘い起こして学問を支離滅裂にすることをおそれざるを得ぬ。特殊なある一部門のみに専念して、この学問全体を振り返らぬのは邪道である」(「民間伝承論」三八一・三八二頁)。これを現在の民俗学者達はどのように受けとめるだろうか。

しかしかくいう柳田自身も、「総合の学」として民俗

刊 月
日本文学 一〇月号 第五六卷第一〇号
 二〇〇七・二〇・二〇発行
 定価九五〇円

特集 〈近世〉江戸と明治のはざまに

純情と演技の間——人情本という鏡
 人情本の再生まで

井上泰至
 山田俊治

——明治初年の恋愛小説に関する一考察——
 所謂「著作道書キ上ゲ」を巡って

佐々木亨

大阪の散切物「早教訓開化節用」をめぐる

佐藤かつら

西南戦争の戦後史の一面

林原純生

——「かなよみ」と「有喜世新聞」そして「西南雲暗朝東風」

菊池庸介

「活字翻刻本」実録の諸相

白戸満喜子

紙維新
 滝沢馬琴と福沢諭吉

高田 衛

——三浦雅士の馬琴理解について——

〈子午線〉表記法をめぐる断想

山本 一

〈読む〉「富嶽百景」のモダニズム

好川佐苗

——写真的感性をめぐる——

井上眞弓

鈴木泰恵著「狭衣物語／批評」に寄せて

安田徳子

安井重雄著「藤原俊成 判詞と歌語の研究」

安田徳子

第62回大会・発表要旨

佐野正俊・須貝千里・丹藤博文
 一 柳廣孝・津田博幸・内藤千珠子

会員(年間10,000円)・定期購読者(年間10,800円)の送料は協会負担
 〒170-0005 東京都豊島区南大塚 2-17-10
日本文学協会 振替 00110-2-50927 ☎03-3941-2740

別冊 國文學

本誌とは一味違う
 魅力が楽しめる

古典学習の必需品[必携]シリーズ

万葉集を読むための基礎百科
 神野志隆光編 定価1470円

夏目漱石事典
 三好行雄編 定価2100円

日本の古典 名言必携
 久保田淳編 定価1370円

宮沢賢治必携
 佐藤泰正編 定価1370円

源氏物語事典
 秋山虔編 定価2100円

ハンジャンルで文学を楽しむ[教養]シリーズ

ギャンブル——破滅と栄光の快楽
 定価1575円

左右／みぎひだり
 雑誌版1680円 改装書籍版1785円

ようこそ絵本の世界へ
 雑誌版1500円 改装書籍版1785円

その時何歳だったのか
 雑誌版1790円 改装書籍版2100円

宗教のキーワード集
 雑誌版1790円 改装書籍版2100円

學燈社

〒169-8608 東京都新宿区西早稲田3-5-10
 電話 03(5228)7154 FAX 03(5228)7150

すべての商品はHPでもお買い求めいただけます
<http://www.gakutousya.co.jp/>

学を完成させたとは言いがたい。膨大すぎる仕事は、その膨大さゆえに、一部二部の資料の分類整理と評価に迫られ、終始してしまった感がある。「惜しいことをした。昔話や方言などに熱を上げるんじやなかった。もう時間が足りない」(堀一郎 前掲「柳田国男と宗教史学」と、最晩年の柳田は盛んに娘婿に漏らしていたらしい。

柳田が志していたもの、それを受けとめなければならぬ。しかし世間では、他にネタがないのか、柳田批判の洪水である。一国民俗学という狭いナシヨナリズム。植民地主義的傾向。勤皇心と漂白民像の歪み。柳田学の非歴史性。官僚によって構築された「常民」などなど、どれも鋭い指摘で感心させられる。しかし、それら批判を読むことで、これまで気付かなかった柳田自身の使命感が、むしろ感じられてもきた。「世のため人のため」「人間生活の未来を幸福に導くため」の志向は、さまざまに理解と誤解を生み出すほどに、多様で強靱なものであった。そして知った。管見ゆえかもしれないが、その志向を、恥ずかしげも無く継承しようという論が一つもないということ。これはチャンスなのだろうか、それとも異なのだろうか。